

# 『瑜伽師地論』<sup>1)</sup>本地分 — 三世実有説批判 —

秋 本 勝

## (1) 和訳

### I 三世実有説 YBh 122, 13~

[122, 13] 「過去・未来のものは実在する」という主張とはいかなるものか<sup>2)</sup>。例えば、これ (= 過去・未来のもの) について或る沙門または婆羅門、または、これについて [或る] 法論者 (= 有部<sup>3)</sup>) は正しい根拠もなく次のような見解を持ち次のような主張をしている。「過去のもの是有る、未来のもの是有る。[123] [過去・未来のものは] 特性<sup>4)</sup>をもって完成している<sup>5)</sup>。[即ち、過去・未来のものは] 現在のものと全く同様に、実在し、仮象的存在ではない」[と]。

#### I-1 教証

[123, 2] 何を根拠にそのような見解を持ちそのような主張をするのか。教証と理証とによってである。

[124] 教 [証] とはいかなるものか。[それは以下、] 前述したものと同様に見られるべきである<sup>6)</sup>。

[124, 2] ここで法論者 (= 有部) は經典 [の内容] を正しい根拠をもたずに判別するのである。

[第一教証<sup>7)</sup>] 例えば「すべてが有るとは十二処である」[と説かれた] ように、十二処は [三時において各々その] 特性をもって [確立して] いる。

[第二教証<sup>8)</sup>] [同様に、] 例えば [125] 「過去の行為は有る」と世尊によって説かれたように。

[第三教証<sup>9)</sup>] [また、] 「過去の物質的存在は有る、乃至、認識に至るまで [同

様である。] [と説かれた] ように [三時のものの実在は確定している]。

## Ⅰ-2 理証

[125, 3] 理 [証] とはいかなるものか。例えばこれ (= 過去・未来のもの) について、或る論理的探究者<sup>10)</sup>は [云々。以下は] 前述したものと同様である<sup>11)</sup>。

彼の [論理] は次のようである<sup>12)</sup>。本性<sup>13)</sup> (= 各存在要素自身の特性) をもって確立された存在要素は [三時のどこにおいても] その [本性] をもって完成している<sup>14)</sup>。もしその未来のものが無いなら、それゆえに本性をまだ得ていないものになってしまう。もし過去のものがないなら、それゆえに本性をすでに失ったものになってしまう。そのようなときには、それ (存在要素) は完成した本性を持たないことになってしまうから、[過去・未来のものが無いというの] は不合理である。よって、彼は、過去のものも有る・未来のものも有るという見解をもち、そう主張する

## Ⅱ 三世実有説批判

### Ⅱ-1 理証批判

#### Ⅱ-1-1 理証批判(1)

[125, 9] [これに対して] 次のことを言わねばならない。汝は、過去・未来のものの特性は現在のものの特性と異なるのか、異なるのか、いずれだと認めるのか。もし [三時の各々のものの] 特性は異なるなら、特性が三時を確立することはあり得ない。[また、] もし [各々の] 特性は異なるなら、[三時を通じて] 完成した特性というものはあり得ない。

#### Ⅱ-1-2 理証批判(2)

[125, 12] [また、] 次のことも言わねばならない。汝は、[各々の] 時間にある存在要素は恒常という特性をもつのか無常という特性をもつのか、いずれだと認めるのか。もし恒常という特性をもつ [と言う] なら、三時にあること

[自体] が [126] 不合理である。もし無常という特性をもつ [と言う] なら、それ (= 無常) ゆえに三時において全く同様に存在するということが不合理である。

### Ⅱ-1-3a 未来のものと現在のものとの関係に関する七つの問

[126, 3] [また、] 次のことも言わねばならない。汝は、①未来のものが現在時へ到来すると見るのか。或いは、② [未来のものが未来のものとしては] 消滅して [現在のものとして] 生じて来る [と見る] のか。或いは、③未来のものは全くそのままにありながら、それ (= その未来のもの) を縁として現在のものが生じて来る [と見る] のか。或いは、④作用しないものが作用するものとなる [と見る] のか<sup>15)</sup>。⑤不完全なものが完全なものとなる [と見る] のか。⑥相違するものが相違しないものとなる [と見る] のか<sup>16)</sup>。⑦未来のものなるものに現在のものなることがある [と見る] のか<sup>17)</sup>。

### Ⅱ-1-3b 未来のもの・現在のものの関係に関する批判

[126, 6] [七つの問に関して以下に論じよう。] ①もし [未来のものが現在時へ] 到来するなら、それゆえに [未来のものは現在のものと同じ] 領域を占めて現在のものと区別されず、[それゆえに] 恒常であることになる。よって、[汝にとって] 不合理である。②もし [未来のものが未来のものとしては] 消滅して [現在のものとして] 生じて来るなら、それゆえに未来のものが生じるのではなく、[別の] 新しいものが生じるのであって、生じない [未来の] ものは消滅する。よって、[汝にとって] 不合理である。③ [もし未来にも現在にも] 全く同様に存在するものが [何かを] 縁として [現在に] 生じるなら、それは [一方で] 恒常なものでありながら<sup>18)</sup>、[他方で] 新しいものが生じるということになる。[それはつまり] 未来のものが [そのまま現在に] 生じたわけではないから、[汝にとって] 不合理である。④もし作用しないものが生じて作用するものとなるなら、それゆえに「前に無くて今有ること」[が成立する]。[即

ち、直前の③と] 同一 [の理由] から、言われたような過失があることになる<sup>19)</sup>。よって、[汝にとって] 不合理である。また、汝は、その作用は [存在要素と] 異なるものなのか異ならないものなのか、いずれだと認めるのか。もし異なるもの [と認める] なら、それ (=作用) には未来という様相はないから、[汝にとって] 不合理である<sup>20)</sup>。[また、] もし異ならないもの [と認めるの] なら、それゆえに作用しないものが生じて作用するものとなる [即ち、「前に無くて今有ること」になる]。よって、[汝にとって] 不合理である。

[127] ⑤・⑥・⑦作用しないものと同様に、不完全なもの<sup>21)</sup>・相違するもの・未来のものなること<sup>22)</sup>も知られるべきである。そこでは、この [未来のものとの] 違いは本体の混乱という過失を伴うから、[汝にとって] 不合理である。

## II-1-3c 現在のものと過去のものとの関係に関する批判

[127, 2] 「未来のものとの現在のもの [の議論]」と同様に、「現在のものと過去のもの [の議論]」も各々 (=上述の①～⑦) に応じて過失と結びつくと見られるべきである。[それは、すでに述べた] 諸理由と答論の方法とによってである。[即ち、] 独自相に基づいても<sup>23)</sup>、一般相に基づいても<sup>24)</sup>、到来に基づいても、消滅に基づいても、縁って生じることに基づいても、作用に基づいても、完全性に基づいても<sup>25)</sup>、相違に基づいても、未来のものなることに基づいても、過去・未来のものが実在するという主張は不合理である。

## II-2 教証批判

### II-2-1 第一教証(無所縁心の否定) 批判

#### II-2-1a 有部の主張

[127, 8] ところが、上のように論じられたとき、さらに [彼 (=有部) は次のように] 言うであろう。

[有部の主張<sup>26)</sup>:] 「もし過去・未来のものが無いなら、存在しない [その過

去・未来の] ものを対象とする認識はどうして起ころうか。しかしそれは起こる。よって、[もし過去・未来のものが無いなら、]『すべて』と説かれたものは、十二処という限りのものである」という経<sup>27)</sup>との矛盾がどうして起こらないか[起こってしまう]と。

## Ⅱ-2-1b 有部批判

[127, 10] [これに対して] 次のことを言わねばならない。「無い」(=非存在)と把握する認識は世間では起こらないのか起こるのか、汝はいずれだと認めるのか。もし起こらないと認めるなら、それゆえに無我を把握する[認識]や兎の角・石女の息子等を把握する認識は全く存在しない[ことになる]から不合理である。

「すべて、即ち、十二処である限りのものがある」と説かれたことも、有るときは「有る」という様相があることを、無いときは「無い」という様相があることを密意して説かれたのである。即ち、「有る」という様相を持つ諸法(諸存在要素)<sup>28)</sup>は「有る」という様相を保持し、「無い」という様相を持つ諸法(諸存在要素)は「無い」という様相を保持するから、諸法(諸存在要素)と言われるのである<sup>29)</sup>。しかし、そうでないなら、「有る」ものを了知するが「無い」ものを了知しない[ことになる]から、「認識」直後に了知されるべき諸法(諸存在要素)の[有無の]考察が瑜伽行者に起こらない[ことになる]。よって[過去・未来のものの実在は]不合理である。

## Ⅱ-2-2 第二教証(過去の行為の実在)批判

[127, 19]「過去の行為は有る」と説かれたのは、有情は、患いがある(苦)、または、患いはない(楽)と [128] いう感受を抱くからである<sup>30)</sup>。それ(=過去の行為)についても、それ(=過去の行為)の薰習に対して「それ(=過去の行為)はある」と、比喻を意図して説かれたのである。[即ち、] 諸々の因果的存在には浄不浄の行為が生じたり滅したりしているが、その[行為]が因

となり縁となって因果的存在の特殊な連続が起こるのであり、それが薫習であると言われる。連鎖したものである〔薫習〕から、望ましい或いは望ましくない結果が得られるのである。よって、〔過去・未来のものの実在は〕不合理であるから、〔我々の説明に〕過失はない。

### Ⅱ-2-3 第三教証<sup>31)</sup>批判

〔128, 5〕「過去・未来・現在の物質は有る、乃至、認識に至るまで同様である」と説かれたことについても、因果的存在の三種の様相を密意して説かれたのである。〔即ち、〕原因という様相、自体の様相、結果という様相である。〔現在のものの持つ〕原因という様相を密意して「未来のものは有る」と説かれ、〔現在のもの〕自体の様相を密意して「現在のものは有る」と説かれ、〔現在のもの持つ〕結果という様相を密意して「過去のものには有る」と説かれたのである<sup>32)</sup>。従って、〔この我々の理解に〕過失はない。

### Ⅲ まとめ（三時の各時間の十二の特徴）

〔128, 10〕また、過去・未来のものの実体としての特徴は不合理であるが、未来のものの特徴は〔以下の〕十二種であると知るべきである。①原因によって生ぜしめられるもの<sup>33)</sup>、②その形はまだ生じていないもの、③縁を待つもの、④生じたものに類するもの、⑤〔これから〕生起する性質のもの、⑥生起しない性質のもの<sup>34)</sup>、⑦雑染性がまだ生じていないもの、⑧清浄性がまだ生じていないもの、⑨求められるべきもの、⑩求められるべきでないもの、⑪考察されるべきもの、⑫考察されるべきでないもの、である。

〔128, 14〕現在のものの特徴は十二種であると知るべきである。①結果として生ぜしめられたもの、②その形が生じたもの、③縁を伴って〔生じた〕もの、④生じているもの、⑤瞬間的に存在するもの、⑥〔再び〕生起しない性質のもの、⑦雑染性を伴うもの、⑧清浄性を伴うもの、⑨望まれるべきもの、⑩望まれるべきでないもの、⑪考察されるべきもの、⑫考察されるべきでないもの、

である。

[129] 過去のものの特徴は十二種であると知るべきである。①原因（=現在のもの）が過ぎ去ったもの、②縁が過ぎ去ったもの、③〔現在時の〕結果が過ぎ去ったもの、④その形が解消したもの、⑤その本体が消滅したもの、⑥〔再び〕生起しない性質のもの、⑦雑染性が沈静したもの、⑧清浄性が沈静したもの、⑨望まれるべきもの、⑩望まれるべきでないもの<sup>35)</sup>、⑪考察されるべきもの、⑫考察されるべきでないもの、である<sup>36)</sup>。

## (2) 校訂テキスト

YBh 122, 12~129, 4

I

[122, 13] atūtānāgatadravyasadvādaḥ katamaḥ | yathâpîhâikatyaḥ śramaṇo vā brāhmaṇo *vêha*<sup>37)</sup> dhārmiko vā punar ayoniśa evaṃdṛṣṭir bhavaty evaṃvādī | asty atītaṃ | asty anāgataṃ | [123] lakṣaṇena pariniṣpannaṃ | yathâiva pratyutpannaṃ | dravyasat | na prajñaptisat ||

I - 1

[123, 2] kena kāraṇena sa evaṃdṛṣṭir bhavaty evaṃvādī | āgamato yuktitaś ca ||

[124] āgamaḥ katamaḥ | *sa*<sup>38)</sup> pūrvavad draṣṭavyaḥ |

[124, 2] iha dhārmiko vā punaḥ sūtrāntān ayoniśaḥ kalpayati | *tad yathā*<sup>39)</sup> sarvam astīti dvādaśāyatanāni | dvādaśāyatanāni lakṣaṇato vidyante |

tad yathā asty a [125] tītaṃ karmēty uktaṃ bhagavatā |

tad yathā | asty atītaṃ rūpam asty anāgataṃ yāvad vijñānann ||

## I — 2

[125, 3] yuktiḥ katamā | yathâpîhâikatyas *târkiko*<sup>40)</sup> bhavati mîmâṃsaka iti pûrvavat |

tasyâivaṃ bhavati | yo dharmo yena *svalakṣaṇena*<sup>41)</sup> vyavasthitaḥ *sa*<sup>42)</sup> tena pariniṣpannaḥ | sacet so 'nâgato na syât tena tadânupâttaṣvalakṣaṇaḥ syât | saced atîto na syât tena tadâ vihînasvalakṣaṇaḥ syât | evaṃ sa saty apariniṣpannasvalakṣaṇaḥ syât | tasmâd apariniṣpannasvalakṣaṇaḥ syâd iti na yujyate | yena | sa evaṃdrṣṭir bhavaty evaṃvâdî asty atîtam api | asty anâgatam apîti ||

## II

### II — 1

#### II — 1 — 1

[125, 9] sa idaṃ syâd vacanîyaḥ | kaccid icchasy atîtânâgatalakṣaṇaṃ vartamânalakṣaṇâd abhinnalakṣaṇaṃ vâ bhinnalakṣaṇaṃ vâ | *saced*<sup>43)</sup> abhinnalakṣaṇaṃ | *tryadhva*<sup>44)</sup> vyavasthânaṃ lakṣaṇasya na yujyate | *saced*<sup>45)</sup> bhinnalakṣaṇaṃ pariniṣpannalakṣaṇaṃ na yujyate ||

#### II — 1 — 2

[125, 12] sa idaṃ syâd vacanîyaḥ | kaccid adhvpapatitaṃ dharmam nityalakṣaṇam icchasi anityalakṣaṇam vâ | *sacen*<sup>46)</sup> nityalakṣaṇam tryadhvpapatitam iti na [126] yujyate | *saced*<sup>47)</sup> anityalakṣaṇam | tena triṣv adhvasu tathâiva vidyata iti na yujyate ||

#### II — 1 — 3a

[126, 3] sa idaṃ syâd vacanîyaḥ | kaccid anâgatasya vartamânam adhvanam âgatiṃ vâ paśyasi | cyutvâ vôpapattiṃ tathâiva vâ sthite 'nâgate



taṃ pratītya vartamānotpattiṃ | akarmakasya vā sakarmakatvaṃ |  
asampūrṇalakṣaṇasya vā sampūrṇalakṣaṇatvaṃ | *vilakṣaṇasya vāvilakṣaṇatvaṃ*<sup>48)</sup>  
| anāgatabhūtasya vartamānabhāvaḥ |

## II – 1 – 3b

[126, 6] saced āgacchati | tena deśasthaś ca bhavati | vartamānanirviśiṣṭaś  
ca | śāśvataś cēti na yujyate | *sacec*<sup>49)</sup> cyutvōpapadyate tenānāgataś ca  
nōtpanno bhavati | apūrvaś cōtpanno bhavati | anutpannaś ca cyuto bhavatīti  
na yujyate | *sacet*<sup>50)</sup> *tathāiva*<sup>51)</sup> sthitaḥ pratītyōtpadyate | *śāśvataś*<sup>52)</sup> ca bhavati  
| apūrvaś cōtpanno bhavati | anāgataś cōtpanno *na*<sup>53)</sup> bhavatīti na yujyate |  
saced akarmako vā bhūtvā sakarmako bhavati | *tenābhūtvābhāva*<sup>54)</sup> ekata eva  
yathoktā doṣā iti na yujyate | tac ca karma kaccid icchasi tasmād bhinnalakṣaṇaṃ  
abhinnalakṣaṇaṃ vā | saced bhinnalakṣaṇaṃ | tasyānāgatalakṣaṇaṃ nāstīti  
na yujyate | *saced*<sup>55)</sup> abhinnalakṣaṇaṃ | tenākarmako bhūtvā sakarmako bhavatīti  
na yujyate ||

[127] yathākarmaka *evam asampūrṇalakṣaṇo*<sup>56)</sup> vilakṣaṇo  
'nāgatabhāvalakṣaṇo veditavyaḥ | tatrāyaṃ viśeṣaḥ svabhāvasaṅkaradoṣa iti  
na yujyate |

## II – 1 – 3c

[127, 2] yathānāgataṃ vartamānaṃ *cāivaṃ*<sup>57)</sup> vartamānaṃ atītaṃ ca yathāyogaṃ  
doṣayuktaṃ draṣṭavyam ebhir eva kāraṇair anenāivōttaramārgeṇēti svalakṣaṇato  
'pi | sāmānyalakṣaṇato 'pi | āgatito 'pi | cyutito 'pi | pratītyotpattito 'pi |  
karmato 'pi | *sampūrṇalakṣaṇato*<sup>58)</sup> 'pi | vilakṣaṇato 'pi | anāgatabhāvato 'py  
atītānāgatadravyasadvādo na yujyate ||

II –2

II –2–1

II –2–1a

[127, 8] evaṃ vyākṛte ca punaḥ saty uttari vadet | *saced*<sup>50)</sup> atītānāgataṃ nāsti | katham asadālambanā buddhiḥ pravartate | sā ca punaḥ pravartate | tat katham āgamavirodho na bhavati | yad uktaṃ sarvam iti yāvad eva dvādaśāyatanānīti |

II –2–1b

[127, 10] sa idaṃ syād vacanīyaḥ | kaccid icchasi nāstīti grāhikāyā buddher loke ‘pravṛtṭiṃ vā pravṛtṭiṃ vā | saced apravṛtṭiṃ | tena yā nairātmyagrāhikā śaśaviṣṇānavandhyāputrādigrāhikā buddhir nāivāstīti na yujyate | yad apy uktaṃ sarvam asti yāvad eva dvādaśāyatanānīti tad api sati sallakṣaṇāstītāṃ sandhyāyoktaṃ | asati cāsallakṣaṇāstītāṃ | *tathā hi*<sup>60)</sup> sallakṣaṇā api dharmāḥ sallakṣaṇaṃ dhārayanti | asallakṣaṇā api dharmā asallakṣaṇaṃ dhārayanti | tasmād dharmā ity ucyante | anyathā tu sato jñānād asataś cājñānād yogino na niranantarajñeyadharmaparīkṣā syād iti na yujyate ||

II –2–2

[127, 19] yad apy uktaṃ asty atītaṃ karma yataḥ sattvāḥ *savyābādḥā avyābādḥā*<sup>61)</sup> [128] vedayantīti | tatrāpi tadvāsanāyāṃ tadastitvopacāram abhipretyōktaṃ | yeṣu saṃskāreṣu yac chubhāśubhaṃ karmōtpanna-niruddhaṃ bhavati tena hetunā tena pratyayena vīśiṣṭā saṃskārasantatiḥ pravartate sā vāsanēty ucyate | yasyāḥ prabandhapatitāyā iṣṭāniṣṭaphalaṃ nirvartata<sup>62)</sup> iti na yujyate | tato ‘pi nāsti doṣaḥ ||

II –2–3

[128, 5] yad apy uktam asti rūpam atītam asty anāgatam asti  
 pratyutpannam evaṃ yāvad vijñānam iti | tatrāpi trividhaṃ saṃskāralakṣaṇam  
 sandhāyōktam | hetulakṣaṇam svalakṣaṇam phalalakṣaṇam ca | hetulakṣaṇam  
 sandhāyōktam asty anāgatam iti | svalakṣaṇāstitām sandhāyōktam asti  
 pratyutpannam iti | phalalakṣaṇam sandhāyōktam asty atītam iti | ato 'pi na  
 doṣaḥ ||

### III

[128, 10] api cāivam ayujyamāne dravyato 'tītānāgatalakṣaṇe dvādaśākāram  
 anāgatalakṣaṇam veditavyam | hetuprabhāvitam<sup>63)</sup> | anut-pannaśarīram |  
 pratyayāpekṣam | utpannajātīyam | utpattidharmakam api | *anutpattidharmakam*  
*api* <sup>64)</sup> ajātasamkleśam | ajātavyavadānam | prārthanīyam api | aprārthanīyam  
 api | parīkṣyam api | aparīkṣyam api |

[128, 14] dvādaśākāram eva pratyutpannalakṣaṇam | phalaprabhāvitam |  
 utpannaśarīram | samavahitapratyayam | utpannajātīyam | kṣaṇikam |  
 anutpattidharmakam | samavahitasamkleśam | samavahitavyavadānam |  
 apekṣāsthānīyam | anapekṣāsthānīyam api parīkṣyam | aparīkṣyam api |

[129] [atītalakṣaṇam api dvādaśākāram veditavyam | atītahetukam |  
 atītapratyayam | atītaphalam | vinaṣṭaśarīram | niruddhasvabhāvam | anutpa-  
 ttidharmakam | saṃśāntasamkleśam | saṃśāntavyavadānam | *apekṣāsthānīyam*  
<sup>65)</sup> *anapekṣāsthānīyam* | <sup>66)</sup> parīkṣyam | aparīkṣyam ca ||] <sup>67)</sup>

## 註

- 1) 『瑜伽師地論』(以下『瑜伽論』と略す)の著者は、中国伝承では弥勒、チベット伝承では無著とされるが、内容から見て一人の著者の作とは考えられない。高橋晃一2012は、一人の著者に帰せられるものではないとし、編纂年代を漢訳年代から推定して4世紀頃とする。
- 2) 『瑜伽論』には、根拠正しからざる思惟の仮説として16種の異説が挙げられているが、その主張はYBh (118, 8~12) 及び漢訳(大正30, 303c2~7)によれば以下の通りである。① hetuphalasadvāda(因中有果論)② abhivyaktivāda(從縁顯了論)③ atītānāgatadravyasadvāda(去來実有論)④ ātmavāda(計我論)⑤ śāsvatavāda(計常論)⑥ pūrvakṛtahetusadvāda(宿作因論)⑦ īśvarādikartṛkavāda(計自在等為作者論)⑧ vihiṃsādharmavāda(害為正法)⑨ antānantikavāda(有無無邊論)⑩ amarāvīkṣepavāda(不死矯亂論)⑪ aheturvāda(無因見論)⑫ ucchedavāda(斷見論)⑬ nāstikavāda\*(空見論)⑭ agravāda(妄計最勝論)⑮ śuddhivāda(妄計清淨論)⑯ kautukamaṅgalavāda(妄計吉祥論)\*YBh (118, 11)には⑬を欠くが、YBh (151, 18~)には詳論あり。なお、宮下1986: pp. 17~20には③去來実有論の部分訳が含まれる。
- 3) 周知のとおり、向井1972によって『瑜伽論』における「過去未來実有論」(直前註2の③)は説一切有部説であることが既に論証されている。なお、YBh (122, n.7)には、有部の四論師の説などが紹介されている。
- 4) この“lakṣaṇa-”の和訳については、存在要素の「本性」(svalakṣaṇa-)に近い意味の場合は「特性」と訳し、それ以外は「様相」または「特徴」と訳した。
- 5) 本和訳「2理証」参照
- 6) 119, 5~6: āgamaḥ katamaḥ | tatpratiyuktānuśravaparamparāpiṭakasampradānayanogenāiṣām āgataṃ bhavati “vidyata eva hetau phalam” iti | (=教[証]とは何か。彼(先師)から連綿と続いた伝承の連続による集成の教授と結びついて、彼らに「原因の中に結果が必ず存在する」(因中有果論)と伝承されたものである。)ここでは、サーンキヤ派の因中有果論に代わって「過去のものには有る、未来のものには有る。」云々の句(122, 14~123, 1)が入る。
- 7) 俱舍論の「教証二」(無所縁心の否定)に相当。和訳「3. 1. 1」参照。なお、向井1972で(A')として示された『瑜伽論』・撰決訳分からの引用文は次の箇所であろう。大正30, 584c22~23:「由二種縁-諸識得生。何等為二謂眼及色。如是広説乃至意法-。」なお、『俱舍論』の「理証一」はここに含まれていることになろう。
- 8) 『瑜伽論』では教証とされるが、俱舍論では「理証二」に相当。

- 9) 俱舍論の「教証一」に相当。なお、ここでは存在の分類は五蘊に拠っている。なお、向井1972がこの經に関連して言及する「撰決択分の相当箇所」とは、大正30, 585b19~22:「問如<sub>レ</sub>世尊言<sub>レ</sub>。有<sub>レ</sub>過去行<sub>レ</sub>。於<sub>レ</sub>彼行中<sub>レ</sub>我具<sub>レ</sub>多聞<sub>レ</sub>聖弟子衆無<sub>レ</sub>顧恋住<sub>レ</sub>。有<sub>レ</sub>未來行<sub>レ</sub>。於<sub>レ</sub>彼行中<sub>レ</sub>我具<sub>レ</sub>多聞<sub>レ</sub>聖弟子衆無<sub>レ</sub>希望住<sub>レ</sub>。此何密意。」であろう。
- 10) ここでは、有部がそれに当たる。
- 11) 119, 7~9: yuktiḥ katamaḥ | yathā sa eva śramaṇo vā brāhmaṇo vā tārkkiko bhavati mīmāṃsakas tarkaparyāpannāyāṃ bhūmau sthitaḥ svayaṃ prātibhānikyāṃ pārthagjanikyāṃ mīmāṃsānucaritāyāṃ | tasyāivaṃ bhavati | (=理 [証] とは何か。かの沙門または婆羅門のように、論理的探究者は論理に熟達し、ひとり知性あり、異生凡夫で、探究に勤しむといった地平にあるが、彼の [論理] は以下の通りである。)
- 12) この理証は『俱舍論』にはないが、向井1972が指摘するように、「本性を保持するから『法』である」という有部の「法」(存在要素)規定を『瑜伽論』は理証としたと言えよう(以下の註14参照)。
- 13) YBh: lakṣaṇena svalakṣaṇena に訂正。D63a2/P73b8: chos gang rang gi mtshan nyid -- 大正30 (304c5):「若法自相安<sub>レ</sub>住此方<sub>レ</sub>真實是有。」
- 14) ここで「完成している」(pariṇiṣpanna-)とは、「各々の存在要素は、三時のどの時点でも、それ自身の特性(=本性)を保持している」ということであろう。つまり、『瑜伽論』は、存在要素は過去・現在・未来の三種の位態としては変化しても自身の本性は一貫して維持したままであるという在り方を“pariṇiṣpanna-”と表現している。「確立」「成立」とも訳しうる。宮下2011a, 2011bでは、“pariṇiṣpanna-”は「真に実在するもの」とされ、2011a (p. 67~)では『瑜伽論』の用例が論じられている。cf. AKBh2, 9: nirvaca-naṃ tu svalakṣaṇadhāraṇād dharmāḥ. (訳: 語源解釈としては「本性を保持するから『法』である」ということである。)
- 15) “akarmaka-”, “sakarmaka-”の語が用いられているが、有部が主張する三時の区別根拠としての「作用」(kāritra- or kriyā)と理解してよいと考えられる。cf. 大正30, 304c18:「業」; 583a11~12:「業用」。D63a7/P74a7~8: las mi byed pa zhig las | las byed par 'gyur ram | 宮下1986 (p. 19~)。
- 16) YBh: avilakṣaṇasya(?) vā vilakṣaṇatvaṃ vilakṣaṇasya vāvilakṣaṇatvaṃ と訂正。D63b1/P74a8: mtshan nyid mi 'dra ba las | mtshan nyid mi 'dra ba ma yin par 'gyur ram | 大正30, 304c19~20:「為<sub>レ</sub>本異相今異相<sub>レ</sub>」を「為<sub>レ</sub>本異相今不異相<sub>レ</sub>」と訂正。
- 17) 大正30, 304:「為<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>未來<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>現在分<sub>レ</sub>耶」。

- 18) YBh: na śāśvataś を śāśvataś に訂正。D63b3/P74b3: des na ther zug par yang 'gyur la |. 大正30, 304c26 : 「彼応-是常-」。
- 19) 「別の新しいものが生じてくることになるから、有部の言うように、未来のものがそのまま現在のものとなることはない」ということである。
- 20) 作用は現在にのみ存在するから、作用によって、存在要素が現在だという決定は可能かもしれないが、未来だという決定はできないということであろう。また、現在のものと過去のものとの関係から言っても、作用によって存在要素が過去だと決定することもできないということになる。
- 21) YBh: evaṃ sampūrṇalakṣaṇo を evaṃ asampūrṇalakṣaṇo と訂正。D63b5/P74b6: mtshan nyid ma rdzogs pa dang |. なお、大正30, 305a4 : 「相円満」を「相不円満」と訂正。『瑜伽論』・本地分 (大正30, 304c19) : 「為<sub>下</sub>本相不-円満-今相円満-耶。」cf. 撰決択分 (大正30, 583a13~14) : 「為<sub>下</sub>円■満相-而説. 生耶。謂於-未来-相未-円満-至-現在世-相乃円満。」
- 22) 『瑜伽論』・撰決択分 (大正30, 583a14~18) では、「⑥相違するもの」と「⑦未来のものなること」の内容を一つとして、全部で六種としている。本地分を改訂した結果であるのかもしれない。
- 23) 三時の各々のもの自身の「特性」についての議論 (125, 9~11) を指すのであろう。
- 24) 三時の各々のものが「恒常」か「無常」かについての議論 (125, 12~126, 2) を指すのであろう。
- 25) YBh は “sampūrṇalakṣaṇato 'pi” であるが、チベット語訳 (D63b7/P74b6) は「不完全性」(mtshan nyid ma rdzogs pa) とし、漢訳 (大正30, 305a9) は「完全性」(相円満故) とする。ここはいずれでも特に問題ないと思われるが、文脈上は「不完全性」が良いとも考えられる。
- 26) この有部の見解は、和訳「I-1 教証」のうちの「第一教証」(『俱舍論』の第二教証=第一理証) に当たる。
- 27) 有部は、言うまでもなく、この経の十二処のうちの意の対象たる法に過去・未来のものが含まれることを根拠として三世実有を主張する。
- 28) ここで言う「諸存在要素 (諸法)」は十二処すべてを指す。
- 29) ここでは、dharma- と√dhr とを縁語として論じている。有部の「本性を保持するから『法』(存在要素)である」という定義を逆手に取って批判しているものと考えられる。cf. AKBh2, 9: nirvacanaṃ tu sva-lakṣaṇadhāraṇād dharmāḥ.
- 30) D64b1/P75b3: 'di ltar sems can rnam gnod pa dang bcos pa dang | gnod pa med pa'i tshor ba myong bar byed pas\*. \*P: pa. 大正30, 305b1~2 : 由-此業-

故諸有情受<sub>二</sub>有損害受無損害受<sub>一</sub>。これにより、YBh の註 (127~128, n.8) の結論 (savyābādhyā vyābāddhām) は支持できない。なお、AKBh228, 3~に、三界中の欲界では「善業→樂受」・「不善業→苦受」、色・無色界では樂受または不苦不樂受のみとある。cf. AKBh290, 12: tac ca tayor nāsti paravyābādhahet-vabhāvāt. 「そして、それ (= 苦) は二 (= 色・無色界) にはない。他者に患いを加える原因がないからである」; SA463, 5: paravyābādhasya hetur vyāpādāḥ. 「他者に患いを加える原因とは瞋恚 (十不善業道の一) 等である」

- 31) 『俱舍論』の「教証一」に相当。和訳「1 教証」参照。
- 32) ここでは、現在のを基軸にしている。現在のものが原因となって未来のものが生じてくるから、「[現在のものの] 原因という様相を密意して『未来のものは有る』と説かれる」のであり、現在のものそれ自体については「自身の様相 (= 本性) を密意して『現在のものは有る』と説かれる」というのである。また、現在のものを結果とするなら原因は過去のものであるから「[現在のものの] 結果という様相を密意して『過去のものは有る』と説かれる」という趣旨である。
- 33) “hetuprabhāvyaṃ” の可能性もある。但し、チベット語訳・漢訳からは不明である。“hetuprabhāvitam” の訳が、D64b6/P76a1: rgyur rab tu phye ba, 大正30, 305b13: 「一因所顯相」であり、次の「現在のものの特徴」の①の“hetu-prabhāvitam” の訳が、D64b7/P76a3: ‘bras bu rab tu phye ba, 大正30, 305b17~18: 「一果所顯相」である。
- 34) YBh には、十一種しかないので、ここに “anutpattidharmakam api |” を補う。cf. D64b6/P76a6~7: mi skye ba’ i\* chos can dang. \*P: skyes. 大正30, 305b14 「六不可生法相。」
- 35) ⑨・⑩は、過ぎ去ったものを再び期待すること、しないことの意。cf. D65a2~3/P76a6~7: ltos\* pa’i gnas lta bu dang | ltos\* pa ma yin pa’i gnas lta bu dang |. \*P: bltos. 大正30, 305b25: 「九応恋処相。十不応恋処相」
- 36) この過去のもの十二種の特徴はサンスクリットの写本では欠落しているらしく、YBh はチベット語訳によりサンスクリットに還元している。D65a1~3 / P76a5~7: ‘das pa la yang mtshan nyid rnam pa bcu gnyis yod par rig par bya ste | rgyu ‘das pa dang | rkyen ‘das pa dang | ‘bras bu ‘das pa dang | lus zhiḡ pa dang | ‘gags pa’i rang bzhin can dang | mi skye ba’i chos can dang | kun nas nyon mongs pa rnam par zhi ba dang | rnam par byang ba rnam par zhi ba dang | ltos\* pa’i gnas lta bu dang | ltos\* pa ma yin pa’i gnas lta bu dang | brtag tu rung ba dang | brtag tu rung ba ma yin pa’o ||. \*P: bltos.

大正30, 305b21~26 : 「当<sub>レ</sub>知過去亦有<sub>二</sub>十二種相<sub>一</sub>。一已度因相。二已度縁相。三已度果相。四体已壞相。五已滅種類相。六不復生相。七静息雜染相。八静息清淨相。九応顧恋処相。十不応顧恋処相。十一応觀察相。十二不応觀察相。」

- 37) YBh: vā iha
- 38) YBh: [sa] (チベット語訳“de ni”に基づき“sa”が補われている)
- 39) YBh: tad yathā |
- 40) YBh: 不鮮明
- 41) YBh: lakṣaṇena
- 42) YBh はチベット語訳“de ni”に基づき“sa”を補っている。
- 43) YBh: sa ced
- 44) YBh: tryadhya-
- 45) YBh: sa ced
- 46) YBh: sa cen
- 47) YBh: sa ced
- 48) YBh: avilakṣaṇasya vā vilakṣaṇatvaṃ. 和訳註16参照。
- 49) YBh: sa cec
- 50) YBh: sa cet
- 51) YBh: tathāiva [tatra] (チベット語訳“de la”に基づき、“tatra”が補われている)
- 52) YBh: na śāsvataś. 和訳註18参照。
- 53) YBh: [na] (チベット語訳“ma skyes paï phyir”に基づき、“na”が補われている)
- 54) YBh: tenābhūtṽ bhāva
- 55) YBh: sa ced
- 56) YBh: evaṃ sampūrṇalakṣaṇo. 和訳註21参照。
- 57) YBh: ca evaṃ
- 58) 和訳註25参照。
- 59) YBh: sa ced
- 60) YBh: tathāhi
- 61) YBh: savyābaddhā vyābādhāṃ. 和訳註30参照。
- 62) YBh: nirvartate
- 63) “hetuprabhāvyam”の方が良いかもしれない。和訳註33参照。
- 64) YBh omits “anutpattidharmakam api |”. 和訳註34参照。
- 65) YBh: apekṣāsthānīyaṃ(?) | 和訳註35, 36参照。
- 66) YBh: anapekṣāsthānīyaṃ(?) | 和訳註35, 36参照。
- 67) [ ] を付した4行は写本に欠落しているらしく、YBh (129, n.1) はチベット語訳からのサンスクリット還元文によって補っている。



<キーワード>

三世実有 瑜伽師地論 教証 理証

